

## 『戦争を語る最後の年代の一人として』

廣澤フサ子

今年もまた巡ってきた。終戦記念日が。七十六年前のこの日、私は小学一年生、疎開先の村の長の家に父母とともにいた。疎開先は神奈川県の中井村（現在は町）。終戦は、その地に来て五日目のことだった。

玉音放送は、女の人のみならず、男の人も手をついて泣き出す様子に、とても大切な放送だったんだなと思ったが、意味は分からなかった。

「さあ、今夜から電気に布をかぶせなくてもいいんだよ。」

父の言葉で戦争が終わったことを知った。

二学期になり学校が始まると、一年生の私達まで、薄っぺらな半紙に印刷された教科書に墨を塗らされた。また、通学途上で男子の上級生が「本人の自由、本人の言う通り」などと声高に話しているのをよく耳にした。軍国主義から民主主義への転換が民衆に浸透してきたのだ。

私の家は、昭和二十年八月二日の八王子空襲で焼かれてしまった。いつも空襲警報が出るとラジオ店の土間に掘った防空壕に入るのに、その夜は「ドーン」ととてつもない音にはじかれたように家を出て浅川の河原に逃げた。一緒にいた叔母が、防空頭布をザブッと防火水槽に入れて

てからかぶせてくれた。河原には何家族もの人々がたまりになって避難していた。見わたせば夜空が360度真っ赤になっていた。大人達は「焼夷弾ならば川の水で何とかなるが、爆弾だったら助からない。」と話していた。

そんな恐ろしい夜でも子供の私は母がそばにいますので、よその人が貸して下さった布団で眠ってしまった。次の朝目覚めてびっくりした。一面の焼け野原、あちこちからくすぶった煙が上がっている。私の家族は、焼失をまぬがれた親戚の家にお世話になり、十一日、



七五三の記念写真。母・弟と。

中井村にやって来た。ラジオ店を営んでいた父母は農地解放で得た田畑を耕作していたが生活は困窮を極め、また八王子に戻った。もう少し早く戦争が終わってれば……。私は中学を卒業した年で高校入試に間に合わず定時制高校、短大の二部、通信で教師の道を歩んだ。

2021年11月21日、日野市、多摩平の森ふれあい館にて録音。現在82歳。日野市日野台に暮らしています。

「音聲」で右をタッチすると、本人による朗読が聞けます。